

### 講演3. 山折哲雄（国際日本文化研究センター名誉教授）

[山 折] 私は、まさにいまお話が出ておりました宗教にかかわる寺の長男として生まれて、今日までずっと宗教学や仏教学を中心とする人文学の中で仕事をしてまいりました。数年前に日文研を辞めて、いまは自由を楽しんでいる、人生の中で一番いい時間ではないかと思っております。自己紹介をするときには「老人フリーターです」と申し上げることにしています。

ですから多少遠慮のないことも申し上げることになりますが、その人文学についていいますと、いま非常に元気がありません。いつぐらいから人文学は元気がなくなったのか。二、三十年、ずっとその時代が続いているような気がします。その原因は、人文学自体の問題もありますが、当面それは棚上げして、背景的なことを最初に導入部的に申し上げてみたいと思います。それに三つぐらいあると思っております。

その一つが、類人猿の学問が非常に発達したということを挙げるができる。サル学の発達です。細部を捨象して言いますと、サルの行動を見ていると人間のことはだいたいわかる、という矮小化された一般知識が流布するようになった。日本のサル学は非常に重要な学問上の貢献を果たしてきたと思いますが、ところがその中から紡ぎ出されたいくつかの仮説といったものを、人文学の研究者が積極的に取り入れ始めたということが一つあります。

その結果、人間のことを理解するためにはまずサルを勉強しろと、普通のことのような言われ方をするようになっております。誇張を覚悟で申しますと、それが人文学の力を弱める一つの背景的な要因になったと私はみています。

第2番目は、人工ロボット、工学的ロボット研究の進展です。ロボットの研究を通して人間の相当の部分は理解できる。人工心臓の問題も、インターネットの問題も、全部そこに集約することができるのではないかと思います。要するにロボット学の進歩です。これはやはり人文学の力を強化するというよりは、むしろそれを弱める方向にはたらいてきた。

3番目が、今日のお話である生命科学の進歩です。生命という問題を言葉に表すとき、それに対応する主体としてかつてはまず「人間」という言葉がありましたが、いつのまにかこの「人間」という言葉がほとんど使われなくなってしまって、やがて気がつくそれは「人」という言葉に置き換えられていた。やがてその「人」から「ヒト」へと用法が変化していき、その「ヒト」が限りなく「もの」に近づいていった。私はそういう印象を持っております。客観的な学問の傾向性としてもそうではないかと思えます。

これが人文学の力、潜在能力を弱めてしまうことに効果を発揮している。ロボット学や生命

科学の最新の仮説のようなものを、こんどは人文学者自体が積極的に取り入れ始めて、気がついたら学問としてあり方に元気がなくなっていたということです。これを何とかしなければならぬ。しかし何とかなるのか。もっとも人文学という学問はそもそも元気などはなくてもいいのだ、という説もあります。今日では私などもそれにだいたい加担したい気持ちになっているわけです。ただ、そういう時代を経て、やがてまた人文学が元気になる時代がくるかもしれない。循環の法則を信じれば、いつまでも元気がない人文学の世界が続くとも思えない。

もしかするとそのことを明らかにするのが、先ほどの堀田さんのご意見かもしれない。つまり堀田さんのような方が第3の人生を哲学教授として歩まれるようになれば、人文学が今日おかれているジレンマは越えることができるのではないかと。人文学の世界が多面化する、多様化していくということが可能となるような気がします。これは空頼みなのですが、しかし一方ではもちろん人文学自体がこれからどういう努力をしていくのかという問題があるわけです。

そのことにかかわって、これから私の問題提起を試みたいと思います。できるだけ具体的な現象をとらえてお話を進めてみようと思っていますが、昨年アメリカに発した世界的な金融危機、金融恐慌は、100年に1回の暴風雨といったようなことが言われています。

エコノミスト、経済学者はいろいろな解説、分析を行っていますが、そういうメッセージや言説を聞いたり読んだりしておきまして、私が非常に不思議に思うのは、要するに経済の現象というのは景気循環という根本問題を離れて存在しないのではないかとということです。経済の変動というものには景気の循環ということで、いいときもあれば、悪いときもある、天国的な上昇気流に乗るときもあれば、地獄の奈落の底に突き落とされることもある。それが50年ごとであるか、100年ごとであるかの違いだけではないか。

人類の何百年、あるいは何千年の歴史の中で経済現象の本質をとらえると、それは景気循環というところにはいつくのではないかと、とすると、今日の世界的な危機の状況をなぜそのような経済的な言語で説明しようといわないのか、それが不思議です。

私は宗教学といった学問をやってきたからというわけではないのですが、景気循環という経済用語を、もし普通の大和言葉に翻訳するとすればどういう表現が可能かと考えたときに、無常という言葉が自然に浮かび上がってくる。諸行無常の無常です。これこそがまさに、経済現象も含めて人生万般、世界全体の諸現象を長期的なスパンで眺めたとき、最も包括的な説明原理になるのではないかと思うのです。照る日あれば、曇る日あり、ということです。

もちろん無常という内容は多義的でありまして、たとえば暗い無常と明るい無常という二つの無常観があると思っています。例えばわが国の『平家物語』は暗い無常観です。滅びの美学

をうたいあげた無常観です。それに対してもう一つ、特にアジア的な世界に濃厚に見られることですが、人間も自然も、ときを経てよみがえる、死と再生の循環を繰り返すという考え方があって、それが人間、あるいは社会、あるいは歴史を常に再生させていく原動力になる—そういう考え方です。

無常観というものはなかなか味のあるものなんですね、暗い無常観もあれば、明るい無常観もある。その明るい無常観という問題と、歴史上、発生してきた景気循環という現象は内面的に非常に深いつながりがあるはずだと実は思っていますが、そういう観点から今回の世界的危機に対処するという言論はほとんど生まれてこない。これは私が宗教学という学問をやっているから、そういう観点からの自己中心的な考え方もかもしれませんが、とにかくそれが一つです。

それをもう一つ補足すると、昭和10年代に、すでに寺田寅彦が無常という問題を取り上げています。例えば日本列島はイギリス、フランスといった西ヨーロッパの風土と比べると非常に自然が不安定だというわけです。自然が不安定な原因は地震が多発する国だからで、地震多発国としての自然の不安定さと日本列島人は何万年もの間、ずっとつき合ってきた。地震が発生したとき人間はどのように対処すべきか、社会をどう防衛すべきかということに心を砕いてきた。その知恵を蓄積して日本列島の学問が発生し発展してきたと寺田寅彦は言っているわけです。

その経験の中から日本列島人は「天然の無常観」という認識を育てあげようになったのだといっている。寺田寅彦が言う無常という考え方は、日本列島に固有のローカリティのある無常ですが、それに対して、例えば仏教の無常は釈迦の無常観で、これはもっと乾いた哲学的な認識だったと思います。釈迦の言うインド的な無常観の特徴をいろいろな言い方で説明することが可能ですが、私は三つの原理があったと思います。

一つは、この地上に永遠なるものは一つもない。二番目は、形あるものは必ず壊れる。三番目は、人間は生きて死ぬ。—この三つの原理に基づいた無常ということを釈迦は説いたと思います。それは寺田寅彦が言った、日本列島に固有の地震列島という風土的条件に制約された天然の無常観とは性格を異にします。

つまり釈迦が言う無常観は何人も否定することができない。どんな文明も、これを否定することはできません。ただ問題は、ユダヤ・キリスト教文明はこれを受容しなかった。アングロサクソン文明も、この釈迦の説いた三つの原則に基づく無常認識というものを受容しなかった。これを受容したのはアジア的な世界、とりわけわれわれの日本列島であった。

ですから、景気循環と無常ということを連動させる場合にも心しておかなければならない間

題としてそういうことがある。日本列島人の無常観と釈迦の説いた無常観は違う。それからもう一つ、それを受容する文明と拒否する文明があるということ。この事実をどう考えるかということは、これからの問題だろうと思っています。要するに、すべてのことが循環するということです。そのことが「進歩」の概念とどう関係するか、そういうことをこれから申し上げたいわけです。

第2番目は、最近、温暖化問題で二酸化炭素をいかに減少させるかというところから発して、例えばカーボンオフセットであるとかキャップ・アンド・トレードといったような、排出量を別の手段によって代替する、相殺する炭素排出量の取り引きが行われるようになってまいりました。このカーボンオフセットであるとかキャップ・アンド・トレードといった考え方は、このあいだの洞爺湖のサミットでも同意され、これからはそういう方向でいこうということになっているようですが、それを考え出したのはイギリス人です。そしてそれを非常に洗練された理論に高めたのは、おそらくEUの官僚たちだと思いますが、それを日本の国家は丸ごと受け入れようとしています。

ただ、私はこの温暖効果ガスの問題を、先ほど言いましたような取り引きという考え方で処理しようとしていることに問題あり、と思っているんです。じつは、その考え方のもとにシェークスピアの『ベニスの商人』があるのではないか。そのことをすぐに思い出してしまいます。3000ダカットの借金をした商人が返せなくなって、ユダヤ人のシャイロックが、「それでは契約どおり、おまえの心臓、1ポンドをよこせ」と迫るわけです。心臓近くの肉、1ポンドと3000ダカットは交換可能なのか、等価の価値を持っているのかどうかという問題をシェークスピアは問題として突きつけたわけです。結局シャイロックは尻尾を巻いて逃げてしまう。

おもしろいのは、『ベニスの商人』の一番最後のところで、裁判官のポーシャに言わせている台詞があります。「真の利潤はお金にあるのではない。満たされた心にある」とシェークスピアが、すでにあの時代に言っているんです。この最後の1行を、日本の近代、世界の近代は忘れていてのではないのかと思います。

これは西欧発の進歩主義は信用できないどころの騒ぎではなく、むしろ退歩していることを象徴するものではないか。EU官僚が主唱して、世界がそれを受け入れようとしている炭素取引の問題とはそういう問題ではないか。皮肉にいうと相変らず問題の本質は繰り返されている、循環していると感じます。

次に思い出すことはそもそも西欧社会の性格はどういうものかということです。これはもちろんいろいろな考え方があるので注意しなければいけないのですが、私は何も西の文明、東の

文明という二項対立ですべてを解釈しようと思っているわけではありません。ただ問題の所在を明らかにする意味で、このさきはそういうかたちで議論を進めさせていただきたいと思しますのでお許しをいただきたい。そこで申し上げたいのですが、西欧社会というのはやはりカオスからコスモスへという思考ベクトルが、いつ、いかなるときでも働いているのではないかということなのです。

これはアングロサクソン文明の重要な特色、あるいはユダヤ・キリスト教文明の特色だと言ってもいいと思います。端的に言って、コスモスからカオスへという思考ベクトルを決して受容しようとはしないところがある。それはおそらく無常という考え方を受容することを常に拒否続けてきた西洋社会の性格と対応する考え方だろうと思っております。

そのことを象徴する書物の一つだけ挙げたいと思います。ご専門の先生方を前にして申し上げるのは気が引けますが、二十数年前に、イリヤ・プリコジンという人が『混沌からの秩序』という書物をお書きになりました。これは伏見康治さんが翻訳されたと思いますが、プリコジンは、「揺らぎのパラダイム」ということを最初に理論化して提出した方だと思います。それ以後、揺らぎの時代ということがいろいろな方面で言われるようになった、その走りになった重要な作品だと私は思っております。

現実の世界の諸現象は常に灰色であり、揺らいでおり、秩序ある方向へ向かうのか崩壊へと向かうのか、非常に不確定な時代に世界も入ったし、物理学的な理論上もそういう問題が大きく取り上げられるようになった、ということで、ジャーナリスティックに揺らぎのパラダイムということがもてはやされましたが、そのときのいくつかのキーワードの中で、とくに私が注目したいのが「自己組織化」ということです。

それはこういうことです。現実にはいくらそういう不確実な現象がたくさん存在していても、その中から必ずや自己組織化の動きが出てくるのだという「確信」というか、あるいは信仰、願望といってもいいような、そういう主張がかならず出てくる。言いすぎになるかもしれませんが、そこに秩序幻想といったものがどうしても働くようになる。いや実際に働いていると思えます。

実はこの『混沌からの秩序』という書物に、アルビン・トフラーが序文を書いています、これが非常におもしろいのです。彼はこういう例を引いています。「素通しに見える大きなガラスの箱の中に、何万個の白いピンポン玉と真っ黒のピンポン玉を混ぜこぜに入れて、下から攪拌する力を与える。そうすると、何万個の白と黒のピンポン玉が混ざり合って灰色になる」と言うのです。白と黒が混ざり合うわけですからそうですね。実際に実験をやったようです。

ところが、ときどきパッと白と黒が分かれるときがあるというのです。本当かなと思いますが、トフラーが言うのですから本当でしょう。パッと白と黒に分かれることが、プリコジンの言う自己組織化を象徴する現象なのだという説明の仕方をしておりました。

これは非常に巧みな説明の仕方だと思ってときどき使うのですが、ここに見られるのは、やはり混沌から秩序へ、カオスからコスモスへという思考ベクトルが、プリコジンの頭の中にもトフラーの頭の中にも働いていたということです。これは彼らの個人的な傾向性だけではなく、文明そのものが内包していて、何千年もの間、維持し続けてきた考え方ではないのかと私は思うのです。

別の言葉で言うと、カオス恐怖、カオスという状態に対する限りない恐怖感、不安感。今回の世界的な金融危機の状況でも世界中でこれが起こっているわけで、何とか秩序を回復したいという信仰のような願望がその背後にはある。私はユダヤ・キリスト教文明あるいはアングロサクソン文明ということを言いましたが、じつをいうと、その文明の中に日本人、われわれの社会もスッポリ包み込まれていると思っている。人ごとではないんですね。それはまさにわれわれ自身の問題でもあるわけです。

このカオス恐怖に対してもう一つ、コスモス幻想というのがあります。コスモスというのを、何とかして手元に取り戻さなければいけないという焦りに似た幻想と言ってもいいかもしれない、コスモス思考へのベクトルと言ってもいい。西洋世界の科学技術、さまざまな社会科学、人文科学の発達過程を見ていくと、そこで取り上げられたさまざまなテーマを最終的に締めくくる考え方の原型として、このカオス恐怖、コスモス願望というものが色濃く横たわっている、西欧社会の根底を流れ続けていたということに気がつく。私はそう思います。

それでは、われわれ人類は、なぜこれほどカオスに対する恐怖感を持ち続けているのか。われわれの近代がといてもいい。その原因はどこにあるのか。結論を先に言ってしまうと、カオス恐怖、コスモス幻想の根本的な原因として、人間の欲望という問題があると私は思っています。人間は自分たちのさまざまな、多様な欲望を実現するためには、社会、世界、これが秩序ある構造を持っていなければならないという前提というか理念をいつのまにか打ち立てていた。これはもう一種の信念体系とでもいい。世界がカオス状態に陥ると、われわれはもう自分たちの欲望を十分に解放することができないという恐怖感に圧倒されてしまう。ほとんど思考停止の状態に追い込まれる。

そこで、もしもこのカオス恐怖が、自分たちの欲望を満たすためのそういう秩序願望を生み出してきたのだとすれば、そういう考え方の根本にあるものは何かということになります。こ

れを探るためには歴史的に遡っていく以外にないわけです。そうなったときに、最終的に到達するのがやはり旧約聖書の世界と、もう一つは仏教仏典、そして老荘のテキストということになるのだろうと私は思っています。

それではどういう問題がそこから出てくるか。まず旧約の冒頭に出てくるノアの箱舟物語を思い出していただきたいのですが、地球上に大洪水が発生し、ほとんどの人類が絶滅しなければならないという危機が訪れたとき、ノアの一族だけが神の許しを得て、船を作って、それで生き残ることができたという物語です。

この物語がその後のユダヤ・キリスト教文明の根幹を維持し、社会秩序を形成し続けた。それは宗教的な観念だけではなく、哲学、経済思想、政治思想、現代の医学の先端的の技術の分野にまで深い影響を与えつづけてきた。それが「生き残り戦略」ということだったと思います。それがそのまま歴史を貫いて今日に及んでいると思います。

多くの人間の犠牲を不可避なこととしてこれを認めて、生き残りうる少数の人間を何としてでも救済するという思想です。それが後の進化論につながっていくし、弱肉強食の考え方にもつながっていく。それを方向づけたのが選民思想だったと思います。進歩思想を血肉化した思想の流れですね。

マックス・ウェーバーの経済理論、社会理論も、結局、神に嘉せられ、神に与えられた仕事を忠実に果たすとき、その人間は経済的に成功する、そして心の安定を得る。これが勝ち組みで、その根底に流れているのが選別の思想だったと言ってもいい。これにたいして神の信仰を裏切った人間は経済的に失敗して、不幸な人生を歩む。ところがウェーバーは、こちらの方面についてはあまり研究を深めなかったと思います。このようにウェーバー理論の根底を支えていたのもノアの箱舟物語に発する生き残り戦略だったのではないのでしょうか。

先ほど先端医療の問題にも言及しましたが、脳死臓器移植の技術は、まさに生き残る人間と死ぬ人間を選別する考え方に基づいて初めて考えられた技術だろうと思います。私はいいか悪いか言っているのではありません。タイタニック号の海難事件がありましたが、あれも船に残って船と運命をともにする人間と、救命ボートに乗って生き残る人間とを選別する、そういう現実を反映する人間ドラマして世界に知られていきました。

もう一つ同じような最近の学問状況についてですが、イギリスの大学で哲学的、倫理的な問題として「ロッターリーセオリー」ということが言われています。例えばこの部屋に30人の人間がいる。ある条件があって、このままでいると全員が死滅しなければならない状況に置かれた場合、もしもこの30人の中から10人の人間を犠牲にすれば、あとの20人は生き残ることができ

る。こういう条件が与えられたとした場合どうするか。これが倫理的、哲学的な命題として議論され、研究されている。

結局、その10人を選ぶ最も公平な選び方はくじ引きしかない、ロタリーしかないということになるわけです。老人や子供、そして婦人を別にするというのはタイタニック号の場合の選別の基準でしたが、これは公平性という点ではまだ不十分です。中年の男性でも身体障害者がいる場合もあるだろう、等々の条件を数えあげていくと、結局、最も公平な選択の仕方はくじ引きということになります。功利主義的な経験論の行きつく先がそういうところまでいくのだろうと思うのです。

そのような考え方のもとをずっとたどっていくと、ノアの箱舟の生き残り戦略ということになる。そういう考え方が今日の世界における紛争地点のイデオロギー対立、政治・経済対立、民族的な対立の根っこに横たっている。どちらが生き残るか、ともに譲れない生き残り戦略がぶつかった場合、相互殺戮の状況になる以外にない、そういう状況があると思います。

ここでまことにつらいことに、われわれ自身の社会もその生き残り戦略の中にスッポリ包み込まれてしまっているということです。われわれも、生き残りのための戦略、それを実現するための技術を開発しつづけてきて、今やそれを除いては1日も生きていくことのできない社会を作り上げてしまった。これはまことにつらいところです。

さて、私はこれまで、地球に大災害が発生して、すべての人間が死滅しなければならない状況に置かれたとき、旧約聖書に出てくるノアの箱舟という生き残り戦略を提示してきたわけですが、これにたいしてそれとほとんど同じ時代に、もう一つの選択肢を考え出した文明があったと私は思っております。それが仏教文明、すなわちブッダの考え方にもとづく文明、そして老荘の思想と言ってもいいかもしれません。

説明の仕方は非常に難しいのですが、私はそこに「無常」という思想的な問題が深くかかわっているのではないかと考えています。すべての人類が死滅しなければならないような状況があるとして、その下で少数の人間がたとえ生き残りうる可能性があるとしても、その少数の人間たちもまたその他多数の人間と同じように死滅の運命を引き受けようとする選択です。いわゆる生き残りという言葉を使えば、生き残るも死に絶えるも公平の原則でそれを背負うという行き方であり考え方です。そこに初めて無常観という考え方が出てくるのではないか。

人類が2000年前、3000年前、あるいは5000年前といってもいいと思いますが、破滅的な災害、破局に直面したとき、人類はどういう選択が可能だろうかということをもずっと考え続けてきたと思います。いろいろな選択の仕方が考えられてきたと思いますが、その中で今日の文明の基



礎になるような世界認識として残ってきたのが生き残り戦略と無常戦略、この二つで代表させることができるのではないかと考えております。

そのような人類史的な見取図を前提にした場合、例えば日本人はどういう役割を果たすことができるかということになるわけですが、その問題を一点に絞って申しますと、先ほど申しましたようにアジアの世界で一番近代化に成功したのがわれわれですから、そういう点ではまさにアングロサクソンの生き残り戦略をそのまま受け入れてきたわけで、それともっと古い伝統的な形で血肉化してきた無常戦略というものを何とかつなぎ合わせ統合してみるということではないか。われわれとしては、今さら生き残り戦略を脱ぎ捨てるといわれても、脱ぎ捨てることはもはやできない。

そうであるならば、わずかな希望として、無常戦略というものがまだわれわれの心のDNAというかたちで無意識の中に、われわれの血液の中に流れ続けているのでありますから、それをつなげて統合するという道がのこされている。

話しは変わりますが、1995年1月に阪神・淡路大震災が発生しました。私は京都にいましたが、京都も相当揺れました。そのとき、バラバラに崩れ落ちた本の中から、寺田寅彦の『日本人の自然観』というエッセイを取り出して読んで、先ほどの「天然の無常観」という問題をその文章の中で再確認をしたんです。

じつはそのとき、テレビに映る被災地の被災者の方々の表情が非常に穏やかだったということに漠然と不思議なことを考えておりました。老いも若きも、女性も男性も表情が非常に穏やかでした。その後のことになりましたが、四、五年して、こんどは中越地震が起こり、これも相当にひどい被害が発生しました。その場合も漠然とテレビを見ておきますと、やはり同じように被災者の方々の表情が非常に穏やかで平和なんです。

おかしいな、これには何か意味があるのかもしれないと、そのころから思うようになりました。もしかすると日本列島に住む人々の自然観や世界観とこれは深いかわりがあるのではないかと漠然と思うようになったのです。それは最後は、信仰や宗教心の問題にいくかもしれない。しかしもしかすると、ほとんどのわれわれはそのことを自覚していないかもしれない。

ところが当時、そのようなわが国の災害と並行するようなかたちで、アメリカにおけるハリケーンの大災害、インドネシア沖の大地震や大津波の事件がありました。前後して、パキスタンやトルコでも大地震がありました。つい最近では中国の四川省の大地震ですね。これら、海外における被災地の被災者の方々の表情は、怒りと苦しみと悲しみを全身的に示して、人々の多くが嘆き、悲しんでいる。その世界の状況とわれわれの場合があまりにもかけ離れていて違

うことに胸をつかれたのです。

これはたんなる偶然だろうか。カメラがそういう人々だけを選んで写しているのだろうか、などと考えるようになりましたが、どうしてもそのコントラスト、日本人の表情の穏やかさがたんなる偶然ではないように思えてきたのです。

結局、これは寺田寅彦が言う天然の無常観と関係があるかもしれない。地震列島という風土的条件から影響された、そういう日本人のアイデンティティといったらいいのか、民族的な感覚、そしてもしかすると環境因子を含めた心のDNAというべきものかもしれない。そういう問題として受け取る必要があるかもしれない、と思うようになりました。

そう考えた場合に、西欧発の生き残り戦略とそれにもとづく文明の影響を受けて、われわれは長いあいだ生活してきたわけではありますが、しかし同時にこの日本列島という、アジアの一国としてのこのモンスーン地域には、もう一つの無常戦略という考え方が生まれ、それにもとづく世界認識の仕方が今日なおわれわれに無意識に継承され続けてきていると考えることができるかもしれない。そう思うようになったのです。

そうすると、こんどはその問題をどう理論化し、国際的な言語に置き換えて海外に発信していくかという課題が出てくることになるわけです。それがこれからの大きな問題になるのではないかと思うようになりました。

さて50年後どうなるかということですが、明治維新以降、130年が経っているわけです。ですから、これから50年後ぐらいで、第3の道が見つかるうとは私にはとても思えません。長い時間がかかるんだろうと思いますが、さしあたってやるべきことは、とにかく「世界は一つ」という土俵の上に、これからはとにもかくにも二つの価値尺度があるんだということを主張し、そのもう一つの尺度をその一つの土俵の上に持ち出す試み、運動をいまずぐにも始めるべきではないのかと思っています。

私も、わずかながら国際会議などに参加する機会がありましたが、いつのまにか向こう様が差し出す普遍主義という黄金の尺度を中心に議論させられてしまっているのです。アングロサクソン側が歴史的に鍛えあげ育ててきた黄金の尺度、普遍主義を前にしていつのまにか議論していたわけです。そのことの意味についてはかならずしも否定するわけではありません。それはそれとして認めながら、しかしもう一つわれわれには価値尺度があるということをいついかなければならない。二つの黄金の尺度をその一つの土俵の上に載せて議論をしていくということです。それをやって50年、はたして認めてもらえるかどうかわかりませんが、100年はかかるのかなという感じを持っています。

以上で私の問題提起に代えさせていただきたいと思います。(拍手)

## 山折哲雄氏の講演についての討議

[廣 田] ありがとうございます。ご質問、コメントはありませんか。先ほど宗教の問題が出たのですが、日本は無常観というものはどれぐらい宗教的なものに裏打ちされているのか、私にはよく判断できませんが、やはり仏教思想が背景にあるのだらうと思います。仏教はインドから出てきて、中国、朝鮮半島を通り、日本に入ってきたのだらうと思いますが、アジアの中で、日本の自然観というか人間観というか、先生の言葉だと無常観、そういうものは非常に独特になっています。

私はそう思っていますが、韓国の方は比較的近いかもしれません。そのへんはどういういきさつでそうなってきたのか、先生のお考えがあれば教えていただければありがたいのですが。

[山 折] 私も無常観という考え方を、ただ漠然と地域の別を考えずに言ってきた時代がありました。だが、インドに何度か行っているうちに、釈尊が活躍した地域を歩いていると、まるで風土が違っていると、気がついたのです。ブッダはルンビニーというところで生まれましたが、ここは北インドとネパールの国境近くで、一望千里、砂漠で、乾燥し切っている地域なんです。

釈尊はそれからガンジス川中流域まで、だいたい500kmの道のりを歩いて南下して、そこで活動しているわけですが、このルンビニーからガンジス中流域までの地域が乾燥地帯です。そのことと、釈迦の言う無常観は密接な関係があるのだらうと思うようになりました。ですから日本人が考える無常観とはそこが質的にまるで違った無常になっているんですね。むしろそれは哲学的な認識に近い。突き放すようないい方で、永遠なるものは一つもないといっている。つまりサステナビリティなどというものは一切存在しないということ、非常に乾いた言葉でそのまま表現しております。それはわれわれの、高温多湿のモンスーン風土で育まれた湿った無常観とはまるで違う。

以前、イスラエルに行ったことがあります。イエスが幼年時代を送ったナザレというところからガリラヤ湖を通過してヨルダン川を南下し、エルサレムに入るまでの旅をしました。ご承知のように、ここもものすごい乾燥地帯です。イスラエルのイエスが活躍した舞台の乾燥した風土と、釈迦が活躍した風土が非常によく似ている。

ですから体系的というか教義的に言うと、キリスト教の考え方と仏教の考え方はまるで違い

ますが、その両方とも乾燥した論理を駆使しているという意味では非常に共通性があると思います。その点では、釈迦が考えた無常と日本列島人が考えた無常は、質的に違う。『平家物語』の無常感の世界は、インドでは全然受け入れられないだろうと思います。そういう問題を飛ばしたままの仏教史、宗教概説が今日までずっと行われてきていて、これは問題だろうと思います。

もう一つ、付随的に申しますと、よく地球環境問題が議論されるようになって、砂漠の宗教、森の宗教という対比の仕方が行われるようになっております。一面そういうところもないわけではありませんが、しかし人類の2000年、3000年の歴史を考えると、人類がそもそもいかに生きていくべきかといった事柄にかんして、真に創造的な役割をはたした思想というのはほとんど砂漠の地域から生み出されているのではないかと思うことがあります。森の世界からはそのような創造的な思想は一つも生み出されていないのではないかと。

確かに日本は75%森林に覆われていて、まさに森の文化を享受してきた国ですが、砂漠地帯の文明が作り出した創造的な活動に比べたら、その創造性という観点において相当に見劣りがすると思います。何を言いたいかというと、地球環境問題を真に、根源的に解決する思考、考え方、技術というのはもしかすると、相変らず今後とも乾燥した文明地域から出てくるような気がするということです。

[柴 田] 簡単な質問です。一つは無常戦略と生き残り戦略を二つの軸としてお話しになっていますが、具体的に30人のうち10人が死ななくてはならないという難破船の理論ですが、生き残り戦略の場合はくじで、無常戦略の場合はどうやって決めるのでしょうか。

[山 折] いろいろな方法があると思いますが、危機、リスクと負担を公平に担うといういき方でしょうね。すべての人間が徐々にではあれ、死に向かって歩み始めなければならない状況のとき、すべての人間が同じような運命を甘受しようといういき方です。

[柴 田] 30人、みんな死んでしまおうということですか。

[山 折] いき方の問題としては、そうすることによって10年生き延びるか、20年生き延びるかということになります。決断しようといった場合にはそうですね。おそらく1時間しか余裕がないといった場合は全員で死のうということになると思います。

生き残り戦略の場合でいうと、10人を犠牲にして20人助かろうといったときに手を挙げる人間がいるかもしれません。そういう考え方をまずやめようということです。それから10人を選ぶときにくじ引きにするか、状況を考えて選ぼうかということで、また議論になるかもしれません。そういう多様な選択の仕方は当然出てくるわけですが、1時間のうちに決断せよといっ

たら、全員死のうということです。

[柴 田] 関連してもう一つお伺いしたいのですが、ノアの箱舟の場合と難破船の30人のうち10人ということは、生き残り戦略とはいっても少し違いもあると思います。ノアの箱舟の場合は正しい者たちを救う、間違っている者は救わなくてもいいという、ある意味の選民思想というか、生き残りでも神の御心になつた者だけを残そうということで、そこにはより正しい世界にしようという進歩の思想が隠れていると思います。

タイタニック号などの場合でも、それが何であるかは別として、ある基準をもって選ぶ、社会のために役に立つ人間を残そう、若い人間は今後、社会のために役に立つからそれを残そうといった考え方をする場合と、くじ引きというのは、そこで同じ生き残り戦略といっても違いがあるような気がします。

ヨーロッパの近代の考え方、そしてわれわれがそれを明治時代に受け入れてきましたが、それはやはり役に立つ者を残すという考え方で、完全に恨みっこなしのくじ引きという考え方はなかったのではないかという気がします、いかがでしょうか。

[山 折] おそらくおっしゃるとおりだと思いますが、アングロサクソンの功利主義というのか、いきつくところまでいくと、そこにくじ引きという考え方がでてくる。しかしながらそういう選択方法を、われわれの合理主義は受け付けないだろうと思います。それは合理主義の性格の問題ともかかわるわけですが、10人生き残ることができれば、とにかく生き残らせるための選択をどうしようかということになります、それはむしろ二義的な意味になっていて、とにかく生き残りうる人間を救うという徹底した合理主義になる。それこそが功利主義的な合理主義で、私などにはとてもついていけない。

むしろ日本人の多くの場合は儒教的合理主義ではないかと思っていますが、それは功利主義的な合理主義とはかなり違うのではないのでしょうか。これは実際にやってみないとわからないですが、おそらくくじ引きというようなことは容認しないだろうと思います。ヨーロッパ文明が無常三原則を受容しなかったように、われわれの方はくじ引きに象徴されるような功利主義的な合理主義をギリギリのところでは受容しないだろうと思います。ここはやはり文明というか宗教の違いの難しいところ、おもしろいところ、そしてどうにもならないところだろうと思っています。

[柴 田] いまのお話のもう一つの軸は、カオス恐怖とコスモス幻想という問題だったと思います。これらは確かに人類の中に常にあるものだと思いますが、その真ん中にカオスでもコスモスでもなく、恐怖でもなく幻想でもなく、カオス恐怖があるからこそ秩序への意思というも

のがある。

現実に人類はカオス恐怖の中でも生きていたし、コスモス幻想を持ちながらも生きてきたけれど、歴史の中で現実にやってきたのは、何とかしてコスモスみたいな立派なものではないけれど、せめて何かの秩序を作ろう、それが歴史というものではなかったかという気もしているのですが。

[山 折] 大変なことになってきました。その非常に曖昧な問題に決着をつける一つの方法として、例えばキリスト教文明では原罪という問題、人間の力としてどうしようもない問題を引き受ける考え方の枠組みがもちだされたのではないかと。仏教文明においては宿業という業の問題を出してきますね。カオス - コスモス問題の難所をのりこえるためのキー・コンセプトだったような気がします。そこは、合理主義や進歩主義の考え方ではなかなか解決できないだろうという認識が、人類の長い歴史の中を通して維持され続けてきたような気がします。

そんなことを考えておりますが、ちょっと自信がありません。

[高 畑] 最後におっしゃった森と砂漠のことですが、私は梅原先生のお話を聞きすぎたせいもあるかもしれませんが、むしろ森の神からも独創的な考えは出るのではないかと、文明もそこから出るのではないかと。例えばギリシャ文明であって、けれども文明が発達した結果、周りの森を切り倒して砂漠化したと理解していましたが、日本人は森の民として独創性がないということの弁護に代えて、少しそのへんをもう少しお話ししたいかと思います。

[山 折] 人間の究極的な救い、救済について深い思索を巡らしたのはやはりキリスト教であり、仏教であり、ユダヤ教であり、そしてイスラム教だったんだらうと思います。それらの世界宗教というか代表的な宗教の誕生の背景、その風土的な背景をみるとみんな砂漠、乾燥した地域であることに気がつきます。それが私が申し上げた考え方の一つの起点になっているわけです。

ギリシャの文明と森の関係はどうであったのかということですが、これは歴史を見てみないとわかりません。ただやはりギリシャ文明は最終的には森を開拓、開発してできあがった文明だと私は思っています。森を積極的に大事にした文明とは思えません。梅原さんの説がありますので密かに申し上げたつもりですが、お名前を出されてしまいました。

[御園生] いまのお話の文脈でお聞きしたいのですが、イスラムの宗教は、ユダヤ教とは根元は共通なのではないでしょうか。最近われわれが見聞きするイスラム関連の事件は、先鋭なものが目立ちますが、民族自身は元来非常に穏やかであると聞きます。

つまり、宗教的には同じ根元でも、イスラムは、ユダヤ、キリスト、アングロサクソンとは

だいぶ違うように思えます。つまり、本当に宗教の問題なののでしょうか。そのあたりを教えてくださいいただければと思います。

[片 倉] 山折先生の話にはいつも聞き惚れるものですから、ポーッとしておりました。山折先生は、ユダヤ・キリスト教的アングロサクソンというふうにおっしゃっていましたが、それは宗教学者として山折先生がイスラムの中身をご存じだからというか、日本では一神教だから三つを一緒に考える傾向があります。確かに歴史的に言っても、キリストは初めはユダヤ教から出てきたわけで、イスラムも最初はキリスト教の新興宗教だろうと言われていて、続いているわけです。

ところが、イスラムは7世紀という割合新しい時代に出てきたということではありますが、中身は違っています。大雑把に言うと、世界的なイスラム学者の井筒俊彦さんがおっしゃっていますが、仏教と大変似ているというのです。仏教の思想の中にあるカルマの思想以外は、すべてイスラムの中にあるということです。私はそれをいま勉強しているところですが、確かに先ほどのアジア的停滞というお話で、それが必ずしもいいとは限らないという柴田先生のお話でしたが、しかし大雑把に言うと、何かアジア的なものがあるような感じが私はしております。

仏教もそうですが、イスラムはきわめてアジア的です。だからこそ、いまイスラム教徒が一番多いのはアジアで、特に私たちのすぐ近くのインドネシアやバングラディシュ、インドにも多く、地域的にもそうなわけです。そのへんは山折先生が、ユダヤ・キリスト教文明とおっしゃって、そこにイスラムとおつけにならなかったのは、そういうことを……。

[御園生] イスラム教とユダヤ教、キリスト教は、どこかであるいはどの時点かで非常に大きな質的な断絶が生じたということですか。

[片 倉] そうですね。断絶というのは、だんだん違って来たということですね。それからもう一つは、これは余計なことかもしれませんが、宗教をどう定義するかというのは、今日の柴田先生のお話で進歩主義の定義というか細かくしていただいて、最後のほうに宗教のお話をなさっていましたが、宗教の定義もやはり難しい。例えば共産主義も資本主義も、一種の宗教だと言う人もいるわけです。何か信じるものということからすると、森に生きた人もその中で何か信じる。

ここからは少し飛躍になるかもしれないし、こんなことはここで申し上げるべきではないかもしれませんが、宗教は人間個人個人の魂の救いということで、例えば無常戦略というものでもないかと思いますが、宗教が社会を救えるかということ、おそらく救えないのではないかと思います。

ただ、これも余計な話になるかもしれませんが、イスラムは魂の救済といった字引に出てくるような、いわゆる宗教の定義からはかなり外れているところがある。もちろん魂のことも言うのですが、魂だけが人間ではないというところがあって、生活の仕方全体だと言うのです。

そういう点で言えば、経済などもイスラム金融、イスラム経済などというものがあるわけです。これはマネーゲームの結果、新自由主義経済の中から出てきた、いまの恐慌にはならないはずなのです。西洋と結託して動いた中東地域もありますから、そこがテレビなどには出てきていますが、私はこのあいだ行ってきましたが、相変わらずある種の経済成長はしています。でも、それは宗教だからというよりは、宗教的な思想を基盤にして経済も考えようということであって、いわゆる宗教そのものではないように思われます。

そのへんは社会を救うというか、社会と関連してくるだろうと思いますが、そのほかの宗教は心の問題で、先ほど柴田先生のご質問の中の生き残り戦略か無常戦略か、無常戦略の場合にはどう生き残りを決めるというか、どうするのかとおっしゃった、こちらか、こちらかという選択はおそらくなくて、そういうときになれば生き残りは何らかの方法で、強い者になるのか。そのときの社会状況によって10人決まる、けれども生き残れなかった人間は、無常戦略にすぎることになるのではないかと考えます。余計なことまで申し上げたかもしれません。

[出 口] いまの片倉先生の話は大変刺激になりました。その前に、山折先生が冒頭で、人文学は元気がないとご指摘になって、私は人間文化研究機構に属していて一応、人文学となっております。それと先ほどの柴田先生の携帯電話の話でテクノロジーの発展と文化がついてきていないということがありましたが、これらを混ぜこぜにして考えるといくつか面白いことが指摘できるのではないかと思います。

一つは、人文学は元気がなくはないのではないかとことを感想として持っています。理由は何かという、例えば日本には漫画、コミックというすばらしいものがあって、これが大変な勢いで世界に広がっています。私はてっきり最近の若い人は漫画ばかり読んでいるのだらうと思ったら、とんでもない間違いでした。いまご覧になっていただくとわかると思いますが、電車の中で漫画を読んでいる人はほとんどいなくて、ほとんどが携帯電話になっています。このへんのジェネレーションは本当に変化のスピードが速い。

なおかつ、いまは総理大臣が漫画を読んでいることは周知の事実です。また、瀬戸内寂聴さんが携帯小説にトライされたりしていますが、そういうことから考えると、人文学はこここのところ、紙に文字で書かれた「人文学」から相当いろいろな広がりが出てきているのではないかと



と思っています。

もう一つ言うと、片倉先生の話に刺激を受けた最後の30人と10人の話ですが、伺っていますと、今風の「勝ち組み」と「負け組み」という言葉が思い浮かびました。いまの経済状況もそうですが、ネオリベラリズムというのは、まさに宗教で、進歩主義とは少し違うと思いますが、進歩主義の前に競争主義が進歩を生むのだという信仰に近いものがあるのではないかと考えております。

そういう意味では人文学が元気がないのではなく、経済学が飛んだり跳ねたりしすぎている。経済学が本当に人類の役に立ったのかどうかということに関して非常に疑問を感じているということ、経済学者がいないところですが、発言させていただきます。

最後にもう一つ、私のところで感じるのですが、先ほどの30人の比喻です。30人で、10人を犠牲にすれば20人は助かるというところの合意形成が最も重要なのであって、そこで合意がなされたあとは確かにそういう議論が起こると思いますが、そこに至ることがはたして可能なのかどうか。10人犠牲にならなくても全員助かることができるのであれば、10人は犬死であるし、9人で済むのであれば、1人は犬死です。11人でないといけなければ、全員死亡します。

ノアの箱舟の場合は、ノアがまさに神から選ばれてノアは信じたわけですが、ほかの人は信じなかった。そのストーリーを信じさせることに対して、はたしてバックに何か説得力のある合理的なものが存在するのかどうかは疑問です。そういうことを言っている人はいかさま師かもしれない、30人が「10人犠牲になれば助かる」という状況を共有しうるのか、という点も極めて重要だということです。

さらにはその30人が仮に全部、言語が異なった場合、私のコミュニティにはそういうことが多々ありますが、そうすると、まず30人のうち10人が犠牲になれば20人が助かるという条件に持っていくまでのところに、本当の問題というか現代の難しさがあるのではないか。こういうコメントだけさせていただきたいと思います。

[廣 田] それでは食事の前に、総研大の初代の学長であった長倉先生が今日、わざわざご出席いただいておりますので、ご挨拶をお願いします。

[長 倉] まず第一に、遅れまして大変失礼いたしました。10時からとっていたものですから、思い込みで大変遅くなってしまって恐縮しております。

自己紹介ですが、ここを卒業してから神奈川科学技術アカデミーというところにまいりまして、しばらくそこで活動を続けていました。これは実は神奈川県と深い関係がありまして、こ

こを作るときにも神奈川県長洲知事に大変努力していただきました。この土地は長洲知事の斡旋で、ある会社から寄付していただきました。当時の文部省は、お金がなかったのではないと思いますが、そういうお金がなかなか出ませんで、そういう経緯もあり、神奈川県とは深い関係をもって総研大をスタートしたということは、まず申し上げておきたいと思っております。

それから創設のときには大変いろいろ問題がありました。第一に総合研究大学院大学という名前は3度目ぐらいの名前で、政府と当時いろいろ交渉する間で、総合はどこにつくのですか、総合の次に・が入るのか、あるいは総合研究の次に・が入るのかというふうなややこしい議論を繰り返し、そういう点もパスしてこの大学がスタートしたわけです。

しかしスタートする前に、実は学問の総合化ということで、その問題については基盤機関を中心にして何回か議論をしたわけです。そのときに感じたことは、やはり自然科学系と人文社会科学系の総合化は大変難しい。ということで、初めの構想とはかなり違った感覚を私自身は強く持つことになってまいりましたが、しかし長い目で見れば、やはり学問の総合化ということが大変重要な問題になる。私は総合と分散、この二つの調和を図ることがこの大学の目標であるということで、自分自身も納得してスタートしたということです。

そういう経緯から申しまして、やはり総合化ということは一つの大きな課題であると思っておりますが、実は今日の議論を伺い、大変失礼な言い方で恐縮ですが、私が予期していた以上に人文社会科学系と自然科学系のある種の融合というか相互理解が進みつつあるということを感じまして、大変嬉しく思っているわけです。

それが結論と申し上げてよろしいかと思いますが、どうか一つ、総合研究大学院大学の創設のときの理念を大いに実現するように、今後とも総合化という問題についていろいろご協力をいただければ大変ありがたいと思っております。

それから、今日、伺っております、自然科学系の進歩、進歩ということについて柴田先生から非常に納得のいく、説得力のある説明を伺いました。自然科学系の進歩は私なりに理解できますが、人文社会科学系の進歩とは何かということについて、あるいはもう少し教えていただければ大変ありがたいと思っております。

それだけ加えさせていただいて、今日は大変有益な会を開いていただきまして、廣田先生にも大変感謝しております。どうぞよろしく願いいたします。

[廣 田] ありがとうございます。

食事はお弁当をお配りするそうですので、どうぞよろしく願いいたします。午後は1時半から再開させていただきます。